

寺報

信仰文化

通刊 36号

千葉県いすみ市荻原2136 ☎0470(86)3816

行元寺発行

FAX 同上

歓迎

JR大人の休日倶楽部

観光旅行各社

山門彫刻復元に御協力願います



向拝彫刻に彩色する吉木丈画伯

豪華絢爛

日本一又八の唐獅子



向拝「猊」 悪夢を食う
鉄や銅を食べる
平和のシンボル

JRの支援等で復元

JR東日本文化財団の支援と行元寺文化財保存会の努力で、本堂向拝の「募股に龍」「唐獅子」「猊」等の彫刻五点が極彩色で復元された。

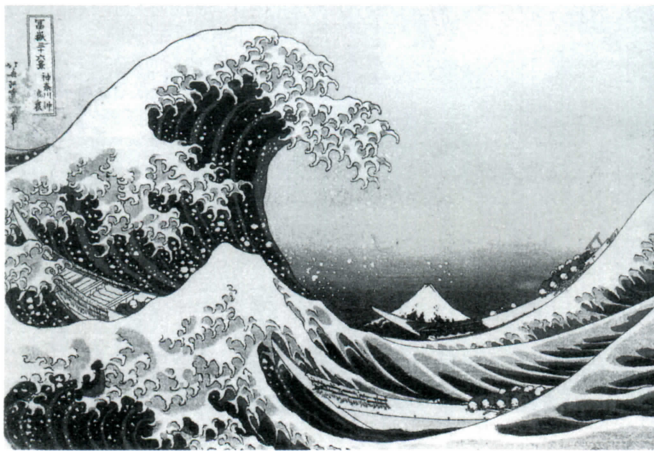
これは江戸期日本一の彫刻師、高松又八の作になり、桃山文化を継承する優雅な作で、十九年秋から十二月末にかけて現代の名工の指定を受けて「斉藤漆工芸」と、吉木丈画伯等によって、当時の豪華絢爛がよみがえった。

波の伊八と岡本太郎

筑波大学教授 齊藤 泰嘉 先生

— 講演要旨 —

「波の伊八」はどんな人だったんだろうと考えるながら、授業でも話しているが偶々、先日東京都の現代美術館で、加藤弘子学芸員と話をしていたら、近く行なう岡本太郎の展覧会の準備中とかで、写真を見せられた。



神奈川沖浪裏図（北斎）

波の伊八の現代性

それは岡本太郎作の「明日の神話」という巨大な壁画で、高さ六メートル、横三十メートルのものであった。そこには前衛性、現代性があつて、岡本太郎は「芸術は爆発だ」と言っていたが、長南町称念寺の波の伊八の「龍三態」を見たときの、その造形感覚が重なって、岡本太郎と波の伊八の現代性を感じた。「龍三態」は伊八が亡くなる前年の文政六（一八三三）年七十二歳のときに成ったもので、彼の究極の到達点というか、彼のたどりついた最高作だと思われる。

伊八とピカソ

そこには造形のダイナズム、江戸のものとは思われない現代性があり、波の伊八とピカソを考えるに至った。その前はすでに言われている葛飾北斎と、行元寺の「波に宝珠」の欄間彫刻と北斎との関係、さらに北斎の「神奈川沖浪裏」がフランスに渡って、カミュクロデルの彫刻「波」になつて、浮世絵版画が彫刻に変わっていった。

こうして日本からフランスへ、イメージが生まれ変わっていった。その過程をみると面白く、ゴッホの絵の夜空に星が渦巻いている「星月夜」、英語のスターリイナイト、すべてが北斎の影響である、ジャポニズムの研究で言われている。

ただ、もつと行くのではない。ピカソまで、そういう北斎に代表される江戸期の空間表現、もし北斎の「神奈川沖浪裏」が伊八の欄間彫刻から影響を受けたとすれば、その空間表現は日本独特のものと思うが、そういうピカソクロデル、ゴッホ、ピカソに至ったものと考え、現代美術の歴史を作って行つた。そういう美術の理論と歴史の面から、波の伊八を見直してみたい。

伊八の魅力はどこにあるのか。ではピカソとは何か。複数の視点から見て彫つた波や龍を、ダイナミックに再構成する動的遠近法、これは東洋的な見る視点から移動する移動視点法、伊八の場合、江戸のキュビズム（立体主義）と呼べる。

ピカソの絵はわかりにくい代表と言われるが、例えば俳句の「菜の花や月は東に日は

西に」をもじつていうと、「ピカソの絵 鼻は東に目は西に」となる。目は横から見た目なのに、鼻は正面から見た鼻、逆に鼻は横から見れば尖（とが）った鼻、目は直線にといたように複数の視点から同一の対象をみて、しかもそれを同一の画面に入れていく。

これが複数の視点による動的遠近法、なぜこういう絵が

伊八の「波に宝珠」と 神奈川沖浪裏の図

それで北斎の場合はどうか。複数の視点と空間表現と組み合わせ、高遠・深遠・平遠・平遠という中国の山水の空間表現が「神奈川沖浪裏」でも使われている。

実は、伊八の「波に宝珠」に高遠・深遠・平遠の動的遠近法、この三つが組み合わさって時間的経過、鑑賞する者の視点の移動、ダイナミックな生きた波の表現に到達していると思われる。

神奈川沖浪裏をみると、まず平遠は平らで遠い素直な遠近法、画面右下の手前の波は下にあつて、遠い波を徐々に積み上げていく。低い視点から遠くをみる、これが平遠。

つぎは深遠だが波が盛り上

生まれるかという、われわれは物を見る場合、動きながら見ている。互いに時間の経過の中で人間は生きている。その時間の経過の中で体験する横顔、正面の顔を一つのものに統合して、われわれは現実を体験している。その時間の経過を絵画の中に導入し現実を絵にすると、ピカソの絵のようになる。

がつて落ちる。この波の肩越しに見て舟がある。われわれは舟に乗っている人を上から覗く。これが深遠法で、この舟はこのところが問題で、よく見ると不思議なコラージュ

というか、切つてあるように見える。船尾は描いてない、これが北斎のすばらしいところである。

前の部分だけで十分、肩越しに描いて、如何に深く下の方へ落ちていくか、そういう空間を体験する。盛り上がつていて、今度は高い山の波の頂を下から見上げるのが高遠法で、絵の鑑賞者の視線は下から上へと移動していく。下から見上げるのが高遠法で、絵の鑑賞者の視線は下から上へと移動してい

く、これが高遠。

さらに北斎は三つの空間表現だけでは満足せず、もう一つの西洋の遠近法を使っている。それはどこかという、陸上の富士山に対して海上の富士、それが小さな女波の波で、よく見ると形がそっくり、遠いものは小さく手前のものは大きく、線で結ぶとここに軸線がで、透視図法的になっている。西洋的な目に見えない軸を設定して、その周りを波が回転するよう見せている。

複数の視点から

これを北斎はどこで学んだか。行元寺の欄間彫刻から三遠を学んだのではない。小さな宝珠を船に置き換え、伊八の逆遠近法で手前を小さく、奥の宝珠を大きく、北斎のピカソに通じるような動的遠近法がみられる。われわれは平遠・深遠・高遠の三つを組み合わせて、この中に入つて、視点を上に、見下したり目を動かしながら鑑賞していく。まとめとしてはピカソのキュビスムに関連する。

行元寺の彫刻で、伊八は馬に乗って、太東岬の海に入つて、馬上から波を見あげたり

見下ろしたり、複数の視点から対象を分析し再構成する。主観的で心の中にあるものを、表現する方法に伊八の現代性

を感じさせる。

もう一つ、波が平らにきて真ん中で宝珠がはじけるように、幾つも波の上に落ちていくような瞬間をとらえた波の彫刻がみられる。そのときに波の筋の線が縦になっている。その宝珠がはじけている波は正面からみている、波の裏側の筋は垂直に立っている。それに対して横に筋が入っている、斜め横から真横から、そういう複数の視点でみている。そこに江戸の生き生きしたダイナリズムを感じる。浮世絵版画はそういうものを持っていた。

ピカソ以上の うねり、ひねり

波の伊八には、ピカソ以上のうねりやひねりがあり、狭い欄間から脱出しようとする爆発力がある。そういう現代作家の一人に岡本太郎がいる。太郎の「明日の呪文」はピカソを意識した壁画である。

〈後略〉

（文責 市原 淳田）

— 19・5・19 —

「江戸彫り物の美研究会」

行元寺



